

第 29 回 日本動物児童文学賞審査委員会の会議概要

I 日 時 平成 29 年 7 月 11 日 (火) 14:00 ~ 17:00

II 場 所 日本獣医師会会議室

III 出席者

【委員】

動物福祉・愛護部会長

木村 芳之 日本獣医師会理事 (動物福祉・愛護部会長)

動物福祉・愛護関係省庁及び教育関係省庁関係者

則久 雅司 環境省自然環境局総務課動物愛護管理室長

清原 洋一 文部科学省初等中等教育局主任視学官

動物福祉・愛護関係学識経験者

内山 晶 日本動物愛護協会常任理事兼事務局長

須田 沖夫 須田動物病院院長

前家庭動物愛護協会会長

成島 悦雄 元井の頭自然文化園園長

日本動物園水族館協会専務理事

望月 克夫 日本愛玩動物協会副会長

【日本獣医師会】 境 政人 (専務理事)

IV 議 事

- 1 委員長の選任 (協議)
- 2 第 2 次審査に至るまでの審査経過等 (説明)
- 3 審査 (協議)
- 4 その他

V 会議概要

冒頭の挨拶として、境専務理事から委員に対して、ご多忙中に 17 作品を精読して 2 次審査に協力いただいたことへの感謝と、昨今話題の国家戦略特区による獣医学部新設に関する本会の考え方等について述べられた。

1 委員長の選任

事務局から委員長選任について説明後、委員の互選により、木村芳之委員が委員長に選任された。委員長就任挨拶として、命の大切さを考えられる優しい子供になってもらいたいと願いつつ、最終審査を進めていきたいので、委員各位のご協力をお

願いたい旨が述べられた。

2 第2次審査に至るまでの審査経過等（説明）

事務局から、日本動物児童文学賞事業実施要領、第29回日本動物児童文学賞作品募集要項、及び応募状況について説明した。特に第29回日本動物児童文学賞作品募集要項において文字数・ページ数の規定が変更された旨、平成29年1月1日から4月20日までの募集期間で、129作品の応募があり、第1次審査を作家の井上こみち氏に依頼し、第2次審査候補作品として17作品が選出された旨を報告した。

3 審査（協議）

各審査委員による審査候補作品の事前審査結果をもとに、協議の結果、別紙のとおり大賞1作品、優秀賞2作品、奨励賞5作品が選定された。

4 まとめ

- (1) 別紙入賞者のうち、大賞、優秀賞受賞者の表彰は、平成29年9月24日（日）東京国立博物館平成館講堂にて開催される平成29年度動物愛護週間中央行事屋内行事の会場において行う。
- (2) 大賞及び優秀賞の3作品は、「第29回日本動物児童文学賞入賞作品集」として製本のうえ、都道府県等の関係機関、小学校等の教育機関及び図書館等に配布される。

【別紙】

第29回日本動物児童文学賞入賞作品

【日本動物児童文学大賞】

「ネコの町」

海見 みみみ(東京都)

<受賞理由>

大事にしていた猫の死をきちんと受け止めるまでを、丁寧に優しい視点でとらえたファンタジー。主張や価値観を押し付ける感じがなく、猫の町に迷いこんだ主人公マナベ君と猫のタイゾーを通して、「動物への優しさ」をうまく書き伝えている。様々な逸話を含む童話仕立ての物語が、子供にもわかりやすく、ペットの身になって考えるよう導く作品。起承転結もしっかりしており、最後は感動的に締めくくっている。

【日本動物児童文学優秀賞】

「ふるさとぼろり」

スーザン ももこ(東京都)

<受賞理由>

川で捕まえられ、飼育されることになったカメを取り上げた作品。動物が自然の中で生きる事への思いが素直に描かれ、自然の環境で生息していくことと、ペットとして飼育されることの違いを子供に考えさせる。外来種の問題にも触れ、生きものに対するやさしい視点から動物を飼うことに正面から向きあった作品。カメの擬人化が過ぎている感もあるが、結末もさわやかで、読後感も良い。

「空からふってきたレニー」

司城 みずほ(三重県)

<受賞理由>

マンションでの動物飼育事情の問題を提起し、子猫を保護してペットとして飼っていくために大切なことは何かを、物語を通して考えさせる。捨て犬・猫、新たな飼い主探し、マンションの決め事、動物アレルギー等の考えさせられるテーマについて、主人公の柚子が自分なりに考えて適正飼養を模索し、大人やマンションの住民も巻き込み、みんなの問題を解決する様子がよく書かれている。言葉を整理するともっと面白くなる。

【日本動物児童文学奨励賞】

「走る馬の向こう側」

まきうち れいみ(東京都)

<受賞理由>

主人公しゅん君の牧場体験を通して、馬に対する愛情や競走馬の世界・一生が描かれており、競走馬の普段見えてこない面を考えさせる作品。題材として、中高生や大人向けの一面もあるが、家畜の命について、少年が自分で悩み、考える点が児童文学作品として評価できる。

「みんな みんな ありがとう」

江角 岳志(東京都)

<受賞理由>

野良猫の世話をする大人と、動物たちとのふれあいの中で心に変化していく不登校の主人公の真亜沙(マーサ)が心を開いていく過程を描く、あたたかみのある作品。現代の社会問題である、不登校児や地域猫の問題を幅広く取り上げ、必ずしも問題解決までは至らないが、少女を立ち直らせる動物の持つ力が描かれている。

「里山の夏休み」

西村 一江(山口県)

<受賞理由>

小学生の兄妹が夏休みに訪れた里山での生活を通して、農山村における人と動物の共生問題に直面し、自然との共存とは何か、野生動物との接し方を考えさせられる。子供の頃にいろいろな動物に接するといった体験は、生態系とその保全の理解に大切である。話題が多岐にわたり、散漫な一面もあるが、大人の知恵や知識、里山の子供たちの戸惑いがやさしい視点で書かれ、動物たちとのふれあいや習性が描かれている。

「信頼できる温もり」

いっき(京都府)

<受賞理由>

学校で飼育されるモルモットを通して獣医師になる夢を抱く子供たちの物語であり、命に対する考え方や、動物の飼育責任が受け入れやすく触れられている。主人公の健には、小学生らしくない一面もあるが、上級生の美代子や、美代子の父の獣医師との交流から、健が動物を理解しようと成長する過程が描かれている。

「羊飼いの少年 サブ」

間山 三郎(群馬県)

<受賞理由>

一般的にあまり詳しくは知られていない、羊飼い、牧羊犬、羊のことがわかりやすく書かれている。羊飼いの家族の生活を通して、動物や人とのかかわりを描き、命をいただくことの意義も伝える。愛犬の死も感情に流されず、動物に対する深い理解と愛情が表現されており、力強く生活する様に心を打たれる。校正をしっかりとするとよい。